



『源氏物語』の治政と聖代のかたち : 天皇親政／外戚政治

村口, 進介

(Citation)

國文論叢, 57:91-101

(Issue Date)

2021-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100477488>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100477488>



『源氏物語』の治政と聖代のかたち

——天皇親政／外戚政治——

村口進介

はじめに

『源氏物語』が描く四代の帝による治政を、外戚の有無や父院の関与する度合いを基準に、歴史学の成果を参照しつつ、桐壺朝と冷泉朝を天皇親政、桐壺院生前の朱雀朝前期を院政、崩御後の後期ならびに今上朝を摂関政治と捉え、各々の政権構造や力学を解き明かす試みは、朱雀朝を中心にこれまでも多くなされてきたが、本稿ではひとまず、かような用語の枠組みに拠らず、具体的な叙述に寄り添い、物語が志向する治政のあり方やかたちを析出し、聖代との関わりを探ることが目的であるが、その過程において、摂関政治などの名づけ可能なかたちが物語に認められる意義についても触れる。

一、「わがまま」な執政臣

「典型的な「ミウチ政治」としての狭義の摂関政治^①」と見なされることの多い、朱雀朝後期の検討からはじめる。

A 帝は、院の御遺言たがへずあはれに思したれど、若うおはし

ますうちにも、御心なよびたる方に過ぎて、強きところおはしまさぬなるべし。母后、祖父大臣とりどりにしたまふことはえ背かせたまはず、世の政御心になはぬやうなり。

（賢木②一〇四）

B（帝）「…。春宮を院ののたまはせしさに思へど、よからぬことども出で来れば心苦しう」など、世を御心のほかにまつりこちなしたまふ人のあるに、若き御心の強きところなきほどにて、いとほしと思したることも多かり。

（須磨②一九八）

掲出した二つの引用文は、朱雀朝における外戚政治のあり方を端的に言い表す箇所としてしばしば取り上げられ、傍線などで強調したとおり、構成要素の重なりが類型的な特徴をよく表わしている。

二重傍線と太字からは、「世」を統べる立場としては柔和すぎる性格ゆえに、「祖父大臣」右大臣、「母后」弘徽殿太后の所業に抗えず、結果的に「世の政御心になはぬ」朱雀帝のすがたが浮きばりになる一方で、帝の思い描く「御心にな」う「世の政」の

内実が、院の遺言の遵守にあることが傍線から知られる。

須磨巻で、帝は朧月夜の前に「院の思しのたまはせし御心を遣へつるかな。罪得らむかし」(②一九七)と泣嘆している。「御遺言」とあつてもよいところ、「御心を遣へつる」と「御心」にかなはぬ」と平仄を合わせたかのような表現が用いられている点は興味深い、たとえ帝に「若き御心の強きところ」があつたとて、光源氏と左大臣の重用を含む遺言の履行ははなだ困難であり、右大臣たちにとってはおよそ受け入れる余地のない内容であることも容易に察せられる。

その意味では帝の意に沿わない彼らのふるまいに一定の妥当性も認められようが、にもかかわらず、A、Bの叙述が、外戚家による専横を強く示唆する表現たりえているのは、これらより前に見えていた、次の行文が響いていよう。

C帝はいと若うおはします、祖父大臣、いと急にさがなくおはして、その御ままになりなん世を、いかならむと、上達部、殿上人みな思ひ嘆く。

D(藤壺ハ) 大后の御心も知りましたまへれば、心にまかせたまへらむ世のはしたなく住みうからむを思すよりも、(同九九)

いずれも桐壺院の崩御を受け、事態の推移を上達部たちや藤壺が案ずる一節で、それぞれの傍線はいかにも右大臣や弘徽殿大后による政治の壟断を予感させる文言だが、実のところ、執政臣が「わがまま」にふるまったり、「世」を「心にまかせること自体を『源氏物語』は否定しない。

E(左右) 大臣の御仲ももとよりそばそばしうおはする、(左大臣ハ) 故院の御世にはわがままにおはせしを、時移りてした

り顔におはするをあぢきなしと思したる、ことわりなり。

(賢木②一〇二)

F世の中の事、ただなかばを分けて、太政大臣(光源氏、この大臣(頭中將)の御まなり。

(遷標②三〇二)

Eは右大臣方の権勢が増すなか、左大臣が桐壺朝を回顧する一節、Fは冷泉朝の始発期の政情を示す一節である。光源氏が夕霧の大学入学を見定めていく思惟のなかにも「わが心にまかせたる世にて」(少女③二〇)とあるほか、「今は天の下を御心にかけたまへる大臣」(玉璽③一一二)、「かの大臣たちの御心にかかれる世にて」(真木柱③三七二)といった表現もみえる。

執政臣が「世」を「わがまま」にするという文言は『蜻蛉日記』や『大鏡』にも見られ、執政臣のふるまいを示す表現としては慣用的であり、このような見地からすれば、Dの傍線の直前に「大后の御心も知りましたまへれば」とあるように、右大臣と弘徽殿大后の場合には「いと急にさがなく」(C)、「御心いちはやくて」(賢木②一〇二)と規定される、帝の「御心」をふみにじるほどの苛烈な性情に対し、批判的な眼差しは向けられているといえよう。

二、帝の「御心になふ」「世の政」

以上から執政臣の「わがまま」なふるまいが、帝の「御心になふ」「世の政」にあやまず合致する政治のあり方を一つの類型として取り出したうえで、他朝も見わたしつつ、朱雀朝後期の様相をなお明らかにしたい。

同じく外戚政治で括られる今上朝は、即位と同時に「右大臣になりたまひてぞ、世の中の政仕うまつ」外舅の鬚黒と、春宮の

外舅で「大納言にな」った夕霧が「いよいよあらまほしき御仲らひ」(若菜下④一六五)を結び、この二人の外戚が中心となり政務を執りしきったが、CやDと同じような懸念が示されることはいばかりか、これに先だつては次の一節もあつた。

G 春宮(今上帝)もおとなびさせたまひにたれば、うち繼ぎて、世の中の政などことなるけぢめもなかりけり。(同一六四)傍線でその成熟が言挙げされるのは、むろん父・朱雀帝の「若さ」の裏返しであるうが、同様の措辞は今上帝が春宮時代に朱雀院を見舞った場面ですで見えていた。

H 宮(今上帝)にもよろづのこと、世をたもちたまはむ御心づかひなど、聞こえ知らせたまふ。御年のほどよりは、いとよくおとなびさせたまひて、御後見どもも、こなたかなた軽々しからぬ仲らひにものしたまへば、いとうしろやすく思ひきこえさせたまふ。(若菜上④一九)

将来の治政の安寧を約束する前提条件に、あらかじめ「おとなび」た帝像を定着させたうえで、「御後見ども」と外戚たちの「仲らひ」に展叙してゆく筆致は、Gから「いよいよあらまほしき御仲らひ」へ語りおさめる流れに重なる。これは「十一」歳で即位した冷泉帝にも繰り返し「おとなし」(濔標②二八一)の評言が用いられたのと同じ構図であり、帝を中心に据えた治政観が読み取れる。

ここであらためてGの傍線につづく「うち繼ぎて、世の中の政などことなるけぢめもなかりけり」に目を向けてみれば、太政大臣の致仕にともなう政権交代はありつつも、帝の「御心にかなふ」治政が冷泉朝と変わらず、継続することの謂いと解せよう。

女三宮との結婚を承引する光源氏の発言のなかにも「おほやけとなりたまひ、世の政御心になふべしとはいひながら」(若菜上④四八)の一節が見えていた。

さて、Hでは帝、春宮それぞれの外舅である鬚黒、夕霧を「御後見ども」と記すが、『源氏物語』では外戚Ⅱ「後見」という関係を必ずしも結ばないことはよく知られている。

『源氏物語』の「後見」が多義的で、辞書的な意味ではその範疇に入らない人物たちをも「後見」に包摂してゆく物語独自の用法が指摘されているが、本稿の関心に照らせば、朱雀帝の外祖父・右大臣をただの一度も「御後見」と記さない点が重要で、それに反して桐壺院が朱雀帝への遺言の冒頭で光源氏のことを「はべりつる世に変わらず、大小のことを隔てず何ごとも御後見と思せ」(賢木②九五)と述べた一文が興味深い。

光源氏と朱雀帝の紐帯は、明石から召喚した光源氏を「常に召し」、「世の中のことも、隔てなくのたまはせつつ、御本意のやうなれば」(濔標②二八〇)などに、その一端はうかがえるが、外戚にあらざる者を「御後見と思す」という表現は他に、当の桐壺院が左大臣を「故院のやむごとなく重き御後見と思して、長き世のかためと聞こえおきたまひし」(賢木②一三八)ことが別の「御遺言」に見える。これを敷衍すれば、実際の外戚関係に関わらず、帝が「御後見と思す」か否かに焦点はあてられていると言えよう。

桐壺巻に、桐壺帝の左大臣に対する「御おほえいとやむごとなき」(桐壺①四八)との一節があり、ここから、帝が執政臣を「御後見と思す」関係は「御おほえ」のかたちで示されると言えよう。

が、「御後見」同様、朱雀帝が右大臣たちに「御おぼえ」を示す叙述も認められない。**H**の二重傍線で朱雀院が春宮に「聞こえ知らせ」た「世をたもちたまはむ御心づかひ」は執政臣たちとの関係性の機微を含んだもの言いと捉えられ、治政に関し苦い思いを抱きつづけた院の千鈞の重みをもつ言葉として、味読したい。

このような「御心づかひ」は桐壺院が光源氏への遺誡で「朝廷に仕うまつりたまふべき御心づかひ」を「かへすがへす」説いたように（賢木②九七）、帝のみならず、臣下の側にも求められるものであり、光源氏は尚侍として出仕する玉鬘に「ただあるべきやう、御心づかひを教へ」（真木柱③三五六）ている。

帝と執政臣の間で交わされる「御心づかひ」を具体的にうかがわせる例として、『うつほ物語』の記事を参照したい。

I太政大臣（藤原忠雅）は、さるやむことなき一の人におはす。

左大臣のおとど（源正頼）、世の中をまつりごち、帝も政を預け給へるやうにて、いささかのこともたまはせではし給はず、奏し給ふことも否び給はず。おとども、朝廷のそしりとあるべきことは、御ためにもやむことなきことなれば、奏し給はず。

（国譲・下・八〇〇）

引用文は、今上帝が藤壺腹の第一皇子を春宮に定めたことで、立坊争いに端を発した政界の混乱がようやく収束したことを告げる「かくて、世の中定まりけり」に直接する叙述である。**I**は続けて「右のおとどをば、」と藤原兼雅にも触れてゆくが、帝は彼ら外舅とではなく、外戚関係のない正頼と緊密な連携のもと、「政」を治めたことが傍線部から知られるが、それに続く奏上をめぐる阿吽の呼吸に留目したい。

『源氏物語』にも、

J親王（式部卿宮）の御おぼえいとやむごとなく、内裏（冷泉帝）にも、この宮の御心寄せいとよなくて、このことと奏したまふことをばえ背きたまはず、心苦しきものに思ひきこえたまへり。

（若菜下④一五九—一六〇）

「御おぼえ」に加え、帝の式部卿宮に対する「御心寄せ」もなみ込みではない関係性のなかで傍線のように、これはと奏上することには「え背きたまはず」とあるほか、今上帝は朱雀院の遺言どおり女三宮を扱い、「何ごとともとのままにて、奏せさせたまふことなどは、かならず聞こしめし入れ」（宿木⑤四七七）しており、

K（光源氏方）七つになりたまひしのかた、（桐壺）帝の御前に夜昼さぶらひたまひて、奏したまふことのならぬはなかりしかば、この御いたはりにかからぬ人なく、御徳を喜ばぬや

（須磨②一八四）

と、光源氏の鑑識眼へ寄せる桐壺帝の信頼は厚かった。

むろん、奏上のすべてが受け入れられるわけでもない。

L后（弘徽殿太后）は朝廷に奏せさせたまふことある時々ぞ、御賜ばりの年官、年爵、何くれのことにふれつつ御心にはなぬ時ぞ、命長くてかかる世の末を見ることが取り返さまはしう、よろづを思しむつかりける。

（少女③七五）

冷泉帝は朱雀院へ行幸した折に、弘徽殿太后も見舞う。太后は御後に候す太政大臣光源氏に接して、「世をたもちたまふべき御宿世は消たれぬものにこそ、といにしへを悔い」（同）、往時を噛みしめるが、**L**のように、年官年爵のことなどが「御心にはかなぬ時」こそ朱雀朝の日々を取り戻したく思うという一節は、強意の係助

詞「ぞ」がよく引き、いかに朱雀朝後期が太后にとって「御心にかなふ時」であったかをあらためて思い起こさせる。

M 今はいとど一族のみ、かへすがへす栄えたまふこと限りなし。

世のおもしろものしたまへる大臣（左大臣）の、かく世をのがれたまへば、おほやけも心細う思され、世の人も心あるかざりは嘆きけり。

（賢木② 一三八）

右大臣の匡政に耐えかねた左大臣の蟄居につづく一節で、傍線には朱雀帝の左大臣への心寄せもうかがえるが、右大臣は他氏のみならず、四の君の婿、頭中将でさえも間違を理由に、「心とけたる御婚の中にも入れたまはず。思ひ知れとにや、このたびの司召にも漏れぬれど」（同一三九）といった狭量な態度で臨んだ。

「一族」と認めた者だけが恩恵にあずかる御代が太后にとつての「御心にかなふ時」であり、同じ時を「御心にかなはぬ」思いで過ごしていた帝との懸隔はあまりに大きい。

ここでⅠの『うつは物語』の記事を読みあわせ、さらに「史上の円融上皇がそうであったように、院の朝政関与は摂政を通して行われ、摂政は、院の意向に配慮しつつもそれを排除する、高度な政治判断や巧妙な政治手腕が要請される」との指摘も参照すれば、「朝廷の御後見をする」光源氏が太后の奏上をあらかじめ斥けていた可能性も考慮されよう。

三、多様な治政のかたち

執政臣の「わがまま」なふるまいが、帝の「御心にかなふ」「世の政」に合致する治政のあり方を範型に、物語全体を見わたしたうえで、両者間で交わされる「御心づかひ」の一例として奏上を

取り上げ、朱雀朝後期の様相を照らしたが、このような右大臣政権を外戚政治の典型とみなす視点は歴史学にも共有され、倉本一宏氏はA・Cの記述を挙げ、「これらは、ミウチ的结合の中に包摂された日本古代天皇制の本質を、無意識のうちに語っていると共に、摂関期の政治の基本構造を象徴的に記述し」、「古記録をはじめとする歴史史料からのみでは、なかなか明らかにし難い」

「摂関や国母が、自己の政治意志をどのようにして天皇に同意させるかという」^⑤「政策決定へのコンセンサス到達の様相をよく伝えている」と説いた。

「摂関期の政治の基本構造」が抽出できることはよいとして、これまでの行論をふまえ、Aの「母后、祖父大臣とりどりにしたまふことはえ背かせたまはず」を見つめなおせば、およそ「御心づかひ」を欠く右大臣たちが帝との間で合意形成を図っていたとは見えず、朱雀朝の評価としては首肯しがたい。また、傍線のように同論では繰り返し「無意識」を強調するが、これにはまず、清水好子氏の慧眼、「そもそも今日私たちは日本歴史学の常識的な用語として「摂関政治」という言葉を使」^⑥っているが、「平安時代におけるそのような権力の握り方を誰が始めて意識にのぼせ、概念化したのか。誰が方法としてのそれを自覚したのか。私は源氏物語だと思ふ」^⑦を反芻したい。

同じ外戚政治の枠組みで括られる朱雀朝後期と今上朝における「ミウチ」の対照的な配置からも、外戚政治の要諦を知悉したうえでの記述であったことは明らかである。朱雀朝後期では外祖父の右大臣と外舅の大納言が廟堂を、母后・弘徽殿太后が後宮をそれぞれ押さえていたが、今上朝では官職を同じくしつつ、政務を担っ

たのは帝と春宮の外舅であり、母・承香殿女御にいたってはすでに亡く、皇太后位が追贈されている（若菜下④一六五）。

このようにもともと濃密な「ミウチ」に圍繞された朱雀朝に対し、今上朝のそれはきわめて薄く、いわば両朝は外戚政治の両極的なあり方を示しており、このような人物の配置、関係の構築はおよそ「無意識」のなせるわざではない。さらに言えば、桐壺朝、朱雀朝前期、同後期、冷泉朝、今上朝には、源氏と藤原氏の組み合わせも含め、一つとして同じ政治体制は認められない。

このように多様な政治のかたちを『源氏物語』が描きわけた意義を、帝の「御心になふ」政治の実現という観点から捉えるならば、外戚政治や院政的な政治状況や体制を構造的に描きだすことと自体や、そのいずれかを理想的な政治体制として称揚することが目的ではなく、物語が見つめていたのは、各々の体制や人間関係のなかにあって、いかに帝の「御心になふ」政治は可能かを探る試みではなかったか。

外祖父や外舅、母后といった帝にとって最も身近で、盤石な後見であるはずの「ミウチ」に支えられた御代であっても、容易に帝の「御心になふ」政治を挫き、外戚家の専横を招きうることを、各人物に際立った性格を付与しつつ、誇張的に描いてみせたのが朱雀朝後期であった。

四、聖代のかたち

外戚に拠らない政務の運営という意味で、桐壺朝や冷泉朝はしばしば天皇親政と評されるが、外戚の有無を指標に外戚政治と天皇親政を対比的に捉えることへの留保は歴史学で言われて久しく、

『源氏物語』研究においても散見される。⁹⁾ いま天皇親政を帝の「御心になふ」政治の謂いとするならば、外戚政治と天皇親政は両立可能である。

また、盛儀と名高い紅葉賀、花宴を御代の晩期に催した桐壺朝と、「いみじき盛りの御世」（総合②三九二）と評される冷泉朝を聖代とみなすことも通説に等しいが、とはいえ天皇親政がそのまますべての御代の実現と理解することも短絡に過ぎよう。¹⁰⁾

冷泉朝の聖代を言い表した「いみじき盛りの御世」は、光源氏と頭中将による内裏総合を経て醸成された文化的状況を記す次の一文に見えた。

Nさるべき節会どもにも、この御時よりと、末の人の言ひ伝ふべき例を添へむと（光源氏ハ）思し、私ざまのかかるはかなき御遊びもめづらしき筋にせさせたまひて、いみじき盛りの御世なり。（同上）

光源氏が主導的な役割を果たし、聖代を現出せしめたという構図は見やすい。これは夕霧の大学入学を契機に大学振興の機運が高まり、人材の輩出が期待される状況を示したうえで、「すべて何ごとにつけても、道々の人の才のほど現るる世になむありける」（③三〇）と語りおさめる少女巻でも繰り返されるところであるが、しかし冷泉朝の聖代とは、このような光源氏を中心とした文化的な営みによってのみ成り立つものでもなからう。

御代を統べるにふさわしい帝か否かをはかる基準の一つに、物語が秩序だった後宮運営を見定めていることは明らかで、桐壺巻で上達部たちから白眼視され、国政の将来が危ぶまれるほど桐壺更衣へ耽溺した桐壺帝も、花宴巻に至っては弘徽殿女御への配慮

も怠らず理性的にふるまう姿が看取され、このような後宮への関わりが、ひいては政治的な安定をもたらすことにつながり、聖帝と認めるに不可欠な面といえる。

『うつは物語』国譲・下にも、「藤壺一辺倒だった帝が、政の一環として後宮の秩序ある運営に自覚的になったことをうかがわせる」⁽¹⁾一節、

○順にて参上らせ給へば、いとはなやかになまめかしくもてなし給ひて、世の中、政もいとかしこうせさせ給ふ。

(八〇〇)

が、今上帝が聖帝の相貌を見せはじめの端緒に置かれている。

かかる点から冷泉帝を考えるとに着目したいのが、絵合巻の、前斎宮の入内から内裏絵合にかけての一連の叙述である。前斎宮の入内に際し、帝はそれを後押しした藤壺から「かく恥づかしき人参りたまふを、御心づかひして見えたてまつらせたまへ」との助言を受け、九歳年長の前斎宮を「大人は恥づかしうやあらむと思」⁽²⁾いつつ、「いたう夜更けて参上」った姿にいざ接してみれば、

P いとつましげにおほどかにて、ささやかにあえかなるけはひのしたまへれば、いとをかしと思しけり。

(二二七三)

と、いかにも恥じらい深くおっとりして、小柄で華奢な雰囲気には帝はたいそう魅せられる。そして、文脈は屈曲し、次のように続く。

Q 弘徽殿には御覧じつきたれば、睦ましうあはれに心やすく思

ほし、これ(前斎宮)は人さまもいたうしめり恥づかしげに、大臣(光源氏)の御もてなしもやむとなくよそほしければ、侮りにくく思されて、御宿直などは等しくしたまへど、うち

とけたる御童遊びに、昼など渡らせたまふことは、あなたたちにおはします。(同三七四)

頭中将の娘で、太政大臣の養女として先に入内していた弘徽殿女御を「よき御遊びがたきに思」っていたことは入内当初から言われ(濤標②三三二)、Qでも慣れ親しむ様子がうかがえるが、それらの文脈のなかに挟みこまれた傍線部、とりわけ「大臣の」以下が深長である。

落ち着いて「恥づかしさ」を感じさせる前斎宮の人柄にくわえ、光源氏の「御もてなし」も丁重で、格式ばっているのが、粗略に扱うことは憚られ、夜御殿へは等しく召したとあり、これは藤壺の助言にみえた「御心づかひ」に適ったふるまいでもあり、女御たちの背後に控える後見の存在をにらみつつ、私情よりも後宮秩序の維持を優先させる帝のすがたが認められ、昼の渡御においても同様の配慮が働いていることは「あなたがち」からも読み取れる。

このち、帝の「よろづのことにすぐれて絵を興あるものに思」す嗜好が明かされ、前斎宮の「いとをかしう描」く姿に「御心移りて、渡らせたまひつつ、描きかよはさせたまふ」と、描画のやり取りを通じて交流を深め、次第に前斎宮方へ昼渡りする頻度の増す様子が、光源氏や藤壺からの働きかけに拠らず、あくまで帝の主體的な「御心」の移りゆきとして、丁寧にたどる点が重要である。⁽³⁾

この状況に危機感を覚えた頭中将は物語絵の制作に励み、それがやがて内裏絵合へ展開し、光源氏方の勝利に終わる過程をいまは省き、敗北を喫したのちの頭中将の動静を記す一節を掲出した

い。

R はかなきことにつけても、(光源氏ガ) かうもてなしきこえたまへば、権中納言は、なほおぼえおさるべきにやと心やましく思さるべかめり。上の御心ざしは、もとより思しみにければ、なほこまやかに思しめしたるさまを、人知れず見たてまつり知りたまひてぞ、頼もしくさりとともと思されける。

(総合②三九一一—二)

総合のような取るに足らない遊びについても、光源氏の前斎宮の引き立ては並々ならず、頭中将は娘、弘徽殿女御に対する世評も圧されるかと不快に思っているようだとあるのに続けて、人知れず帝の様子をうかがい、以前と変わらぬ女御への寵愛ぶりを認め、安堵する頭中将を記しとどめる。御前総合の結果が帝寵を左右することはなく、不安な眼差しでみつめる頭中将に「さりと」と、立后への期待を抱かせるに十分であったことは、帝による秩序だった後宮運営の確かさを証す。

また、Q のやや後には、

S かく隙間なくて二ところさぶらひたまへば、兵部卿宮、すがすがともえ思ほし立たず、帝おとなびたまひなば、さりとともえ思ほし棄てじとぞ、待ち過ぐしたまふ。(同三七五)

と、前斎宮と弘徽殿女御が帝寵を競いあうなか、兵部卿宮が王女御の入内の機会をうかがう記事がある。傍線部「えゝじ」の「ゝ」できないであろう」という憶測の裏づけには、頭中将と同様に、公平な後宮運営に努める帝の態度を看取したゆえの判断が働いているように。

このような冷泉帝のすがたは少女巻の、立后争い後の場面にも

垣間見ることができ。

T 「略」。さすがに、上につとさぶらはせたまひて、夜昼おはしますめれば、ある人々も心ゆるびせず、苦しうのみわぶめるに」とのたまひて、にはかにまかでさせたてまつりたまふ。御暇もゆるされがたきを、うちむつかりたまひて、上はしづしづに思しめしたるを、しひて御迎へしたまふ。(③五〇)

立后がかなわなかった弘徽殿女御の里下がり、意趣返しも含めて頭中将は強行した。立后ならずといえども、と前接の文脈を「さすがに」で屈曲させ続く傍線部に、「新編全集」は(略)部に見える一節「女御の世の中思ひしめりてものしたまふを」とは「やや矛盾、大臣自身の激した感情がやや先行する行文」と施注するが、「つと」や「夜昼」にはふさぎ込む女御を気づかい、これまで以上に寵愛をかたむける帝の様子が読みとれる。

頭中将もその意をくみ取っていたらしいことは傍点「めり」から知られ、ゆえに強引な内裏退出が示威的な意味を帯びる。二重傍線部にはそれに抗い「均衡を保とうとする帝らの政治的判断」¹⁴が働くも、不満げな頭中将を察し、「しづしづ」女御の退出を認める文脈に、後宮勢力への配慮を怠らない冷泉帝の、聖帝たる相貌を認めてよからう。

光源氏の権勢の基盤を形づくる前斎宮の入内と立后を記す総合巻と少女巻に、御前総合と夕霧の大学入学という、文化的に爛熟した冷泉朝聖代を象徴する事象のみならず、秩序ある後宮運営へ主体的に関わる冷泉帝のすがたを同時に記しとどめていることは偶然ではなからう。桐壺帝の場合にも盛儀の花宴と弘徽殿女御を気づかう場面は一つならに描きこまれており、『源氏物語』が文

化的営みと秩序だった後宮運営の両面から聖代を捉えていたことが、かような記事の配置から知られる。

五、冷泉帝の「御おぼえ」

帝の「御後見と思す」者たちへの態度が「御おぼえ」のかたちで示されることは第二節で触れたが、冷泉帝の「御おぼえ」の対象は光源氏よりもより、多方面にわたり、これも少女巻に集中的に見える。

・右大将（頭中将）をはじめきこえて、御伯父の殿ばら、みな上達部のやむごとなき御おぼえことにてのみのしたまへば、

（③二〇）

・兵部卿宮と聞こえしは、今は式部卿にて、この御時にはましてやむごとなき御おぼえにておはする、御むすめ本意ありて参りたまへり。

（同三二）

・帝よりはじめたてまつりて、思したるさまなべてならず、世にめづらしき（夕霧ノ）御おぼえなり。

（同六二）

頭中将とその兄弟たちをはじめ、帝の伯父にあたる紫の上の父、式部卿宮、夕霧への信望も示し、のちには鬚黒もこの列に連なる。

この大将（鬚黒）は、春宮の女御の御兄弟にぞおはしける。大臣たちを措きたてまつりて、さし次ぎの御おぼえいとやむごとなき君なり。

（藤袴③三四二）

このように広く臣下へ信望を寄せる姿勢は、冷泉後宮の全体像を示す真木柱巻の記述、「ことに乱りがはしき更衣たち、あまたもさぶらひたまはず。中宮、弘徽殿女御、この宮の女御、左の大殿の女御などさぶらひたまふ。さては中納言、宰相の御むすめ二人は

かりざさぶらひたまひける」（③三八二）にも通じており、Fで「世の中の事」は光源氏や頭中将の「御まま」であるとしつつも、決して彼ら一辺倒ではない、目配りの行き届いた御代の形成に大きく寄与している。

そのなかでとりわけ注目されるのが式部卿宮への「御おぼえ」である。それが「やむごとなき」ものであったことはすでに前掲Jにも見え、奏上に背くことはできないと記されていたが、一方でこれも少女巻に、紫の上が光源氏の後援をうけ父宮の五十賀を準備する文脈のなかに、宮の次の心内描写が見える。

U年ごろ世の中にはあまねき御心なれど、このわたりをばあやにくに情なく、事にあはれはしたなめ、宮人をも御用意なく、愁はしきことのみ多かるに、

（少女③七七）

光源氏は須磨へ分離したのちに距離を置いた宮が恨めしく、帰京後に冷淡な態度で接したことは、これと同文的な言い回しですでに言われていた。

V兵部卿の親王、年ごろの御心ばへのつらく思はずにて、ただ世の聞こえをのみ思し憚りたまひしことを大臣はうきものに思しておきて、昔のやうにも睦びきこえたまはず。なべての世にはあまねくめでたき御心なれど、この御あたりは、なかなか情なきふしもうちまぜたまふを、

（濡標②三〇二）

このように私情のもつれから光源氏とは懸隔のある式部卿宮に対し、帝が厚い信望を寄せることは、大局的に見れば、政権の埒外に置かれかねない宮を包摂する機能を果たし、具体的には王女御が立后争いに加わる機会を用意した。その結果、帝が退位する直前の若菜下巻にはJにつづけて「おほかたも、いまめかしくおは

する宮にて、この院、大殿にさしつぎたてまつりては、人も参り仕うまつり、世人も重く思ひきこえけり」(④一五九)とあり、光源氏と頭中将に次ぐ位置づけがなされ、世評も高い。

冷泉朝が源氏、藤原氏に加え、親王家にも開かれ、全方位的な支持を取りつけた御代として成り立つ礎には、かような帝による働きかけのあったことを確認しておきたい。

おわりに

雨夜の品定めが発端、女性三品論に続けて実例の披露へ話題が転じるまぐらに、左馬頭が「狭き家の内のあるじ」(帚木①六一)たる良妻選びの難しさの比喩として次のように語る一節がある。

男の朝廷に仕うまつり、はかばかしき世のかためとなるべきも、まことの器ものとなるべきをとり出ださむにはかたかるべしかし。されど、かしこしとても、一人二人世の中をまつりごちしるべきならねば、上は下に輔けられ、下は上に靡きて、事ひろきにゆつろふらむ。(同六一—一二)

傍線はいかにも聖徳太子「十七条憲法」にも通じる国家経営の理念的なかたちを開陳しているが、四、五節で確かめた冷泉帝のふるまいは、ここに示される貴族社会のあり方を具現したものと捉えられよう。

*本文の引用は、『源氏物語』は新編日本古典文学全集(小学館)、『うつほ物語』は室城秀之『うつほ物語全改訂版』(おうふう)に、それぞれより、巻名・冊番号・頁数を記し、傍線など私に付した。

注

- (1) 日向一雅「桐壺帝と桐壺更衣——親政の理想と「家」の遺志、そして「長恨」の主題——」(『源氏物語の準拠と話型』至文堂、一九九九年、初出一九九六年)、浅尾広良「朱雀帝御代の権力構造」(『源氏物語の準拠と系譜』翰林書房、二〇〇四年)、湯浅幸代「朱雀朝の「摂関政治」——摂関と母后の位相・関係性から——」(『源氏物語の史的意識と方法』新典社、二〇一八年、初出二〇〇六年)、①高橋麻織「桐壺院の〈院政〉確立——後三条朝の史実から——」(『源氏物語の政治学 史実・準拠・歴史物語』笠間書院、二〇一六年、初出二〇〇九年)、②同「弘徽殿太后の政治的機能——朱雀朝の「母后」と「妻后」——」(前掲書、初出二〇一四年)、助川幸逸郎「物語が桐壺帝に託したもの——摂関時代に、「天皇親政」の理想を抱く帝王が存在し得たか、をめぐって——」(同氏他編『新時代の源氏学2 関係性の政治学I』竹林舎、二〇一四年)など。
- (2) 前掲注①「高橋②論文。なお、以下、本稿では行論の都合上やむを得ない場合をのぞき、「摂関政治」は用いない。右大臣や鬚黒の摂関職就任を明示する本文はなく、それらを想定せずとも理解は十分可能と考える。拙稿「ただ人にて朝廷の御後見をする」光源氏」(『国語と国文学』九五・四、二〇一八年四月)参照。
- (3) 加藤洋介「後見」攷「源氏物語論のために」(『名古屋大学国語国文学』六三、一九八八年・一二月)
- (4) 福長進「少女巻の朱雀院行幸」(『むらさき』四四、二〇〇七年・一二月)
- (5) 倉本一宏「『源氏物語』に見える摂関政治像」(『摂関政治と王朝貴族』吉川弘文館、二〇〇〇年、初出一九八六年)
- (6) 清水好子「源氏物語執筆の意義」(『源氏物語論』塙書房、一九六六年)

(7) 前掲注(1) 日向論文は天皇親政、高橋①論文は父院による院政、瀧浪貞子「わたしの『源氏物語千年紀』」(『本郷』七七、二〇〇八年九月)は摂関政治を、『源氏物語』は理想的な政治体制として描いたとする。

(8) 佐々木恵介「天皇の変貌と摂関政治」(『天皇と摂関閥白』講談社、二〇一二年)

(9) 高橋亨『源氏物語』と後宮文化論のための素描(森一郎他編『源氏物語の展望』六、三弥井書店、二〇〇九年)、前掲注(1) 助川論文

(10) 今井久代「書評 袴田光康著『源氏物語の史的回路 皇統回路の物語と宇多天皇の時代』——「聖代」という皮肉——」(『日本文学』五九一一二、二〇一〇年二月)

(11) 新全集③三五五鑑賞注

(12) 土方洋一氏はPやQを掲出し、冷泉帝の「言動については触れられることがない」ことを理由に、「御前の絵合という場面設定に関わるだけで、作中人物としては描写の外に置かれる空白として残される」とするが(『空虚なる主体・冷泉院』森一郎編『源氏物語作中人物論集』勉誠社、一九九三年)、本文で述べた帝の心情の変化は人物論的に捉えることも可能であろう。

(13) 新全集③五〇頭注一一

(14) 針本正行編『源氏物語の鑑賞と基礎知識 二七 少女』(至文堂)、一一一頁脚注

(むらぐち しんすけ／摂南大学非常勤講師)